

エリート警視正の溺愛包囲網

〜クールな彼の激情に甘く囚われそうです〜

### プロローグ

猛暑の名残がすっかり消え去り、風がひんやりと冷たくなった十月の夜。

「怖いかな？」

深澤咲良は、自身を組み敷く男性の瞳をじっと見つめた。

怖いか、という問いかけに対する答えに悩んだのは、わずかな時間。

正直に言えば、まったく怖くないとは思えない。咲良にとって、これから先のことは未知の世界。漫画やネットから得た知識はあっても、それはあくまで目で見ただけのこと。

改めて自分が当事者になり、そこに足を踏み入れることになる考えると、小さな恐怖心や不安はあった。

けれど、目の前にいる彼——堂本桜輔のことを怖いとは思わない。彼はいつだって、咲良を思いやってくれている。優しく気遣い、宝物を扱うように大切に接してくれる。

それを知っているからこそ、これから自分の身に触れるのが桜輔であるということは咲良にとって、怖いことではなかった。

そう思い至り、首をゆるゆると横に振る。すると、彼の双眸が柔らかな弧を描いた。

桜輔の瞳はいつも優しい。見た目は武骨そうだが、内面は生真面目。無愛想で取っ付きにくそうな雰囲気（まぶ）を纏（まと）っているのに、咲良に向けてられる視線は穏やかなものばかりだ。

一八〇センチ台後半で筋肉質な体躯（たいく）の彼は、小柄な咲良よりも三〇センチほど身長が高いが、組み敷かれている今も咲良に体重をかけないように気遣（きざ）つてくれているのがわかる。

「咲良が怖（こ）がることはしない」

「うん」

桜輔の視線が、咲良の二重瞼（まぶた）の瞳（ひとみ）を真（ま）っ直（ただ）ぐ見つめる。

華奢（わさ）な身体に似合わないたわやかな胸の下まで伸びた髪を、優しく梳（す）いてくる。それから、骨（ほ）ばった手が滑らかな頬（ほ）に触れ、ぷつくりとした唇（くちびる）をそっと撫（な）でた。

「精一杯優しくするから、咲良は何も考えなくていい。リラックスして、全部俺（おれ）に委（まか）ねて」

咲良が困り顔になり、微笑（こぼ）えを零（こぼ）す。

「難しいです……」

「それもそうか」

「だって……桜輔さんと一緒にいるだけでもまだドキドキするのに、今は桜輔さんのベッドで……ドキドキしすぎてリラックスなんてできないよ……」

眉（まゆ）を下（した）げたままの咲良に、今度は彼（かれ）も困（こ）ったように眉（まゆ）を擗（ひそ）める。

「そういう可愛いことを言（い）わないでくれ」

「え？」

「それでも、必死（めいじ）に理性（りせい）を保（たも）つてるところなんだ」

咲良の頬（ほ）がかあつと朱（あか）に染（し）まる。

その表情（へいし）を見た桜輔（さくら）が喉（のど）仏（ぶつ）を上下（じやうげ）させ、何かを堪（た）えるように息（いき）を吐（つ）いた。

「……ダメだな。話（わ）せば話（わ）すほど、手加減（てかげん）できなくなりそうだ」

何もかもが初めての咲良には、その言葉（ことば）にどう返（か）せばいいのかわからない。

彼は、咲良の心情（しんじやう）を見透（みとお）かすように苦笑（くせう）を漏（も）らした。

「じゃあ、とりあえず俺（おれ）だけに集中（しゆしゆ）して」

それならもうとつくにしている、と言（い）いそうになって、咲良は口（くち）を閉（し）じる。

これ以上何（なに）か言（い）えば、また羞恥（しゆうち）に見舞（ま）われてしまいそうだったから。

ふと、咲良の顔（かお）に影（かげ）がかかる。桜輔（さくら）の顔（かお）が近づ（か）りてくる予感（よかん）に、咲良（さくら）は瞼（まぶた）をそっと閉（し）じた。

触（ふ）れるだけの柔（な）らかなキス。次（つぎ）いで、甘（あま）やかすように唇（くちびる）が食（は）まれる。

結（むす）んだ唇（くちびる）を解（ほど）き、また結（むす）んでは離（はな）れて……。ゆったりとした口（くち）づけが、静（しず）かに繰（くり）返（か）される。

春（はる）の陽（ひ）だまりのように穏（おだ）やかで優しい幸（しあ）せに包（か）まれて、自然（しぜん）と彼（かれ）に身（み）を任（まか）せ始めていく。いつの

間（ま）にか、恐怖（こふ）心（しん）も不安（ふあん）も溶（と）けていた。

ゴツゴツと骨（ほ）ばった手が、ニットの中にそっと入（い）りてくる。陶器（たうき）のごとく白い肌（肌）に触（ふ）れられても、

咲良（さくら）はその温（ぬ）もりですべてを委（まか）ねるように受け入れた。

心（こゝろ）も、身（み）体（たい）も、桜輔（さくら）と重（かさ）ね合（あ）いたい。

素直（すち）な気持ちのままに腕（うで）を伸（の）ばしたとき、風（かぜ）の音（ね）がどこか遠（とほ）くで聞（き）こえた。

## 第一章 はじまりの訪れ

### 一 春の終わりの憂鬱

日中の気温は夏を思わせる日だった、五月某日。

ネイリストとしてネイルサロンで働く咲良は、六階建てのビルの四階に店舗を構える『Mahalo』を後にし、自転車で帰路に就いた。

ダークブラウンの髪が風になびく。仕事中にはだいたい一つに纏<sub>まと</sub>めているせいで、天然パーマに加えて結んでいた跡がついているが、自転車に乗っているおかげで誰にも気づかれないう。

一五センチのやや小柄な身体で夜風を受けながら、そろそろ上着はいらないかもしれない……と考える。

クリーム色の七分袖のシフォンブラウスと膝丈のシフォンスカートは、どちらも薄手の生地ではあるが、体感温度はちょうどいい。昼休憩でランチを摂りに出たときは暑いくらいだった。

(でも、まだ寒い日もあるかな?)

その悩みは、途中で立ち寄ったスーパーの室温が低かったことであっさり解決し、もうしばらく上着は持つていこうと決めた。

アプリでチェックしていた広告を参考にカゴに食材を入れていき、お気に入りのフルーツヨーグルトも放り込む。会計を済ませると再び自転車に乗り、周囲を気にしながらもペダルを漕いだ。

五分もせずに見えた三階建てのアパートの自転車置き場に、ブラウンとホワイトのバイカラーの自転車を止めた。

エントランスのドアに鍵を差し込んで開錠し、背後を確かめるように振り返る。誰もいないことを確認して片開きのドアを開け、足早に二階へと続く階段を上がっていった。

人生で二度目の引越しをするとき、最重視したのは治安と防犯性だった。オートロックであることや一階ではないことも重要で、空いていた部屋のうち咲良が選んだのは二〇七号室である。

寝室が八帖。1DKの自分だけの小さな城。

玄関もベランダもキッチンも狭すぎるが、トイレとバスルームがセパレートタイプなのは嬉しかった。収納スペースが少ないが、できる限り物を増やさないように意識が働くため、それはそれで良かったのかもしれない。

咲良はサッとシャワーを浴びると、キッチンに立った。

今夜のメニューは焼きそばだ。昨日観た動画で紹介されていた海鮮塩焼きそばに心を惹かれ、今日は絶対と同じレシピで作ると決めていた。

ベッドの前のローテーブルに完成した焼きそばと麦茶を淹れたグラスを置き、タブレットを起動する。『アニマルハプニング集』の文字が目に残り、テーブルの片隅でそれを流しながら「いただきます」と呟いて箸を取った。

咲良は、二年制の専門学校でネイルについて学び、現在は『JNEC』の一級、そしてジェルネイルには必須の『JNA技能検定試験』で上級の資格を取得している。

通常、サロンでネイリストとして採用されるには、二級ネイリストの資格で充分だ。しかし、あえてそれぞれの試験で一級と上級まで目指したのは、いづれ独立したいと考えているためである。

今は、都内に四店舗を構えるマハロでネイリストとして働きながら技術を磨き、開業資金をコツコツ貯めている。目標金額にはまだ及ばないが、夢のためだと思うと努力もつらくはない。

食後はすぐに片付けを済ませ、ネイルのデザインを考える。

ネットやSNSで写真を探すだけの日もあれば、自分で撮った写真を見返してインスピレーションを得ることもある。

写真は、自然豊かな公園や美術館、イルミネーションが開催されている施設や、カフェで食べたスイーツなど、様々なものを撮影している。

意外なものが参考になることも多く、自然と趣味と実益を兼ねるようになった。

イメージをイラストに描くかネイルチップにデザインするかはその日によるが、ネイルのデザインを考えるのはほとんど日課と言ってもいい。この時間が楽しみの一つでもあった。

（あ、明日の準備もしておかなくちゃ）

ふと時計を確認した咲良は、イラストをキリのいいところまで描いてから手を止め、チェストから収納ボックスを出した。

中心から両開きのファスナーを開けると、三十六本のマニキュアが並んでいる。蓋の裏側のビ

ニールポケットには、筆やシールといった道具を入れており、咲良にとって大事なものだ。

明日は、月に一度のボランティアの日。

特別養護老人ホーム『ひだまり』に赴き、利用者たちにネイルやハンドマッサージを施す。

こういうボランティアがあると知った二年ほど前から始めたことで、シフトに合わせて月に一度ひだまりに訪問している。

そのボランティアの日が、今日は木曜日の明日なのだ。

シフト制で働くネイリストという職業柄、訪問日は固定できないが、先方はできる限り咲良の希望を通してくれるため、ボランティアを続けてこられた。

咲良はマニキュアや道具に不備がないか確認しながら、明日を待ち遠しく思っていた。

ひだまりは、三階建ての施設である。

一階は事務所とデイサービスに使用され、二階はショートステイの利用者、三階は入居者専用となっており、ボランティアは三階の入居者を対象としている。

咲良が施術するのは希望者だけだが、毎回ほぼ全員が希望する。そうなるとデイサービスやショートステイの利用者まで捌き切れず、結果的に入居者のみを対象にすることになっているのだ。

「今日はどんな色にしますか？」

「そうねえ……この間は桜色だったから、藤色みたいな紫なんかどうかしら？ 梅雨にはまだ早いけど、紫陽花のような色はある？」

咲良の問いに、順番を待っていた堂本セツがウキウキしたように笑った。瞳を輝かせる姿はまるで少女のようで、ネイルチェンジを楽しみにしてくれていたことが伝わってくる。

「ありますよ。これは少し濃い色で、こっちは淡い色なんですけど……紫陽花ならこれかな」  
「あら素敵。これがいいわ」

二本のマニキュアを出して見せると、セツが淡いパープルのピンを手に取り、目を細めた。

セツの手を消毒し、前回塗ったマニキュアを落としてから油分などの汚れを拭き取っていく。

人間の爪は年齢を重ねると薄くなったり弱くなったりするため、負担をかけないように手早く前処理を施し、ベースコート塗っていった。

咲良は、『福祉ネイリスト』の認定も受けている。

JNECやJNA技能検定試験同様、福祉ネイリストも国家資格ではない。ただ、ボランテアをするにあたってもっと高齢者や福祉に対する知識を深めたいと思い、この認定は数日で受けられると知ったことで、すぐに受講した。

結果的に、認定試験を受けて良かったと思う。介護に対しても少しだけ学ぶことができたし、介護者にネイルを施すときの注意点なども勉強できた。

たとえば、昨今の主流であるジェルではなくマニキュアを使用するのは、急変や急病で治療や入院が必要になった際に早急に適切な治療を受けられるようにするためである——というのも、福祉ネイリストの講座で習ったことである。

病院で脈拍などを測るとき、ジェルネイルをしていると正確な数値が計測できないが、ジェルは簡単に落とせるものではない。マニキュアなら除光液で除去できるが、一般的なジェルは機械で削らなければいけないのだ。

それも、機械である程度削ってからジェル専用のリムーバーを浸したコットンで爪をしばらく包み、ジェルが柔らかくなったところで再び機械を使用して綺麗に取り除いていく……という手間がかかる工程が必要である。また、爪への負担も大きい。

ジェルネイルというのは爪の表面に傷をつけることでジェルを密着させるため、爪を薄く綺麗に削り、甘皮や油分といった汚れを取り除かなければいけない。

実際のところ、よほど手の込んだアートでもない限り、ジェルネイルはアートよりも除去や前処理の方に時間がかかる。さらには、ネイルアートをするにあたり、ベースコート・カラー・トップコート用のジェルを乗せるたびにLEDライトで硬化させなくてはいけない。

健康的な人間であっても、人によってはLEDライトを熱く感じることもあり、肌が弱くなったりが爪が薄くなったりしている高齢者には火傷などのリスクが高まる。医療的な観点はもちろん、身体的な負担を考えてもあまり向いていないのだ。

こういうことをきちんと勉強できたからこそ、ネイリストとしてだけではなく、福祉ネイリストとして提供できることも考えるようになった。

「セツさん、もし良かったら紫陽花のイラストを描きましょうか？」

「そんなことできるの？」

「簡単なものでよければできますよ。あ、こういうシールもあるんですけど」

ネイルボックスからウオーターネイルシールを出し、使い方を説明する。

「これは水に浮かべたらイラスト部分が剥がれるようになって、それを爪に置くんです。色々な種類があるんですが、紫陽花あじさいもありますよ」

「今はそんなに便利なものがあるのねえ」

感心するセツに、咲良が百円均一で購入できることを告げると、優しげな目が真ん丸になった。

「こんな素敵なものが百円なの？ すごいわ」

少女のように楽しそうなセツに、咲良はふふつと笑う。

ボランティアという形式上、あまり高額なものは購入できない。

ひだまりは良心的で、材料費は施設側で持ってくれるが、だからといって咲良が仕事で使用するような道具を揃えることは難しい。そこで百円均一というわけだ。

マニキュアは肌に優しい原料のものを選んでいるため、安価なもので揃えることはできなかったが、シールや筆といった道具は百円均一のものでも充分まかなえる。

今はクオリティの高い製品が店頭も多く並んでおり、経費節約という観点でも百円均一は宝箱のような場所だった。

「本当にすごいですよね。ここでボランティアをさせていただくようになってから、こういうものを探すのが楽しみになりました」

「私も新しいものを知れて嬉しいわ。せっかくだから、このシールを使ってもらえる？」

「はい。とびきり可愛くしますね」

シールを貼り、最後にトップコートを塗ってネイルドライヤーでしっかりと乾燥させる。

薬指には、パールが入ったオフホワイトをベースにして紫色の紫陽花あじさいのシールを。それ以外の指には淡いパールをベースにして、人差し指のみ紫陽花の花びらのシールを貼った。

「今日も素敵！ 咲良ちゃんのおかげで爪がとつても可愛くなったし、この歳になってもおしゃれが楽しめるなんて幸せだわ」

満面の笑みを咲かせたセツに、咲良は充足感を抱く。

ネイリストとしての咲良が一番好きなのは、たぶんこの瞬間だ。

客や利用者たちは、新しいネイルに彩られた自身の爪を見ると必ず笑顔になる。

子どものように無邪気だったり、うっとりとしたように目を細めたり、頬を綻ほほむばせたり……。喜び方は人それぞれだが、誰もが明るい表情を見せてくれる。それがとても嬉しかった。

「明後日は孫が面会に来てくれるから、見せびらかすわね。あの子は無愛想だし、女心なんてちつともわかってくれないんだけど」

不満げに言いながらも、セツの表情からは孫の来訪を心待ちにしている様子が窺えた。

施術中、利用者たちは色々なことを話してくれる。世間話に始まり、自分の趣味や生い立ち、家族のこと。

セツが話すのは家族のことが多く、特に孫の話題が群を抜いている。

自身には息子と娘がおり、息子には二人の男の子が、娘には男女一人ずつの子どもがいて、息子夫婦とその長男だけは定期的に面会に来てくれるのだとか。



そして、息子夫婦の長男というのが、三十四歳で警察官だと聞いている。

咲良は会ったことがないが、セツの話から自慢の孫だというのは伝わってきていた。

「警察官なんてお堅い仕事だからか、元来の真面目さに磨きがかかっちゃって。我が孫ながらいい男だと思うんだけど、ちつとも女つ気がなくて心配になっちゃうわ。咲良ちゃんみたいな素敵な子がお嫁に来てくれたら、私も安心できるんだけど」

聞き慣れた冗談を言うセツに、咲良がクスクスと笑う。

（警察官かあ。セツさんのお孫さんなら、もしかしたらあのとき親身になってくれたのかな……）

ふとそんな風に思い、咲良の唇からため息が零れた。

「咲良ちゃん、何だか浮かない顔してるわ。何か困り事？ 私で良ければ話してね」

セツは、咲良のことをとても可愛がってくれている。

まるで孫の来訪を喜ぶ祖母のように接してくれるため、入居者の中では一番親しい。ちよつとした仕事の悩みなどを聞いてもらうこともあるくらいには、咲良もセツに心を寄せていた。

「困り事っていうほどじゃないんですけど……」

「でも、何かあったんでしょ？」

向けられた真つ直ぐな双眸の優しさに、咲良がおずおずと口を開く。

「最近……待ち伏せされることがあって……」

「待ち伏せ？」

「はい……。少し前に知り合った方なんですけど……」

ぼつりぼつりと話し出した咲良は、悩みと疲労を吐くように深く嘆息した。

事の発端は、一か月ほど前。

同僚たちと花見をしようということになり、職場から程近い場所にある大きな公園に四人で繰り出した。そこへサラリーマンらしき五人組の男性から声をかけられ、咲良以外が快諾したことによって、意図せずに合コンのようなものが始まったのだ。

その中の一人の男性がどうやら咲良を気に入ったらしく、連絡先の交換を求められたが、咲良は丁重に断って一人先に帰路に就いた。

ところが、彼——川辺は咲良の同僚を通して職場を知ったらしく、咲良の与り知らぬところで自宅の最寄り駅まで突き止められていた。

もつとも、同僚は駅名までは教えていないそうだが、『深澤さんの家は職場から一駅だから自転車通勤してる』というようなことを話したのだとか。三週間ほど前から咲良の生活圏内で川辺の姿を見かけるようになったのは、そのせいだろう。

彼は何をしてくるわけでもなく、あくまで偶然を装って声をかけてきただけ。回数にすれば片手ほどのことだが、咲良に警戒心を抱かせるには充分だった。

自意識過剰だと言われても、咲良にはそうなってしまう理由がある。

咲良は、以前まで電車通勤をしていた。

職場から三駅先。そこから徒歩十分。マハロへの就職と同時に始めた一人暮らしは、想像よりもずつと快適で気楽で楽しかったが、それも束の間のことだった。



半月が過ぎた頃、通勤電車内で痴漢に遭うようになったのだ。ぱつちりとした二重瞼まぶたに、ぶつくりした唇。清楚で可愛い系だと言われる顔立ちは、昔から変わらない。近所では『可愛い』と評判の少女だったらしい。

だからなのか、咲良は幼い頃からいわゆる「狙われやすい子」だった。公園で母親が目を離れたほんの一瞬すまじの際すまじに知らない男性に手を引かれそうになったり、ショッピングモールでニヤニヤと笑う大人から話しかけられたり……ということは何度もあり、母親はいつも気を張っていたという。

中学生くらいになると、部活や塾の帰りに知らない男性に声をかけられることが増え、時には家まで付き纏まとわれそうになったこともある。友人と一緒にいるときや両親が送迎してくれるときは良かったが、一人で帰宅する日には恐怖心と戦いながら全力疾走した。

そんな日々が嫌で、高校も専門学校も自転車通学ができる距離にある学校を選んだ。

しかし、就職後は電車通勤を避けられず、痴漢被害に遭うことが増えたのだ。

電車通勤といっても三駅のため、電車を利用してはいる時間はもの十分弱。幼い頃の経験もあり、最初から目立たないように地味な服装を心掛けたり女性専用車両に乗ったりと、咲良なりにできる限りの自衛はしていた。

それなのに、どういうわけか加害者に目をつけられてしまう。女性車両に乗れなかった日はそう多くないのに、三か月も経たずに脚や臀部でんぶを触られるといった被害に十回以上遭った。

痴漢被害に遭えば声を上げればいいと言う者もいるが、現実には恐怖心と不快感で身体が硬直し、

いつも身じろぎするだけで精一杯だった。

そして、結局は耐え切れなくなり、自転車通勤ができる今の家に引っ越したのだ。

「警察には相談した？」

「いえ……何かされたわけじゃないですし……。それに、警察に話したところで……」

そこまで言っていて、ハッと口を噤つぶんだ。

セツの孫は警察官である。セツにとって自慢の可愛い孫と同じ職業に就く人のことを、この場で悪く言いたくはない。

けれど、咲良は警察が何もしてくれないことを知っている。

中学時代、知らない男性に家まで突き止められそうになったとき、母親に連れられて近くの交番に相談に行ったことがあるからだ。

その際に警察官に言われたのは、『パトロールを強化します』ということだけ。なんでも、実害がない限りは警察ができることはほとんどないのだとか。

咲良のように『自宅を突き止められそうになった』程度では動けないらしい。それを聞いて怒った母親の顔と自身に芽生えた絶望感は、鮮明に覚えている。

以来、意図的に男性を避けるようになり、二十七歳になった今ではそれが癖になっていた。

「でも、何かあってからだと遅いでしょう。早く相談した方がいいと思うわ」

セツの言葉はもつともだが、咲良はそれが意味のないことだと知っているため、苦笑いでごまかすことしかできない。

「セツさんもネイル終わったの？」

そこへ介護職員の藤野寛ふじのひろしが現れ、セツの爪を覗き込むようにした。

「そうなの。可愛くなったでしょ？」

「本当だね。セツさんがいつも以上に美人に見えるなあ」

「まあ、藤野さんったら。褒めたって何も出ないわよ」

「僕の下心、バレてたかあ」

漫才のようなやり取りに、咲良は思わず小さく笑ってしまう。彼の登場によって先ほどの話が終わったことにホッとし、二人の会話を聞きながらマニキュアや道具を片付けていった。

「咲良ちゃん、事務長が『次のボランティアの日を相談したいから帰る前に来てほしい』って」

「わかりました」

男性が苦手な咲良だが、藤野とは出会ったときから比較的普通に話せた。

彼の穏やかな話し方や男性にしては華奢な外見は、いい意味で警戒心を抱かせない。細い目にかげられた丸縁の眼鏡が真面目そうな性格に似合っていて、猫毛つぽい黒髪からも柔らかな雰囲気か漂っている。

父親と四歳下の弟、親戚以外の男性では唯一、彼が緊張せずに話せる相手かもしれない。

「じゃあ、今日はこれで失礼します。来月もよろしくお願いします」

「うん。またよろしくね」

「咲良ちゃん、気をつけてね」

藤野に続けられたセツの言葉には、挨拶以上の『気をつけて』が込められていた。

咲良はその気遣いを受け取るようににっこりと微笑んでお礼を告げ、「またセツさんにお会いできるのを楽しみにしてますね」と返した。

## 二 不意打ちの笑顔

六月に入ると、初夏とは思えない暑い日が続くようになってきた。

咲良が出勤する八時過ぎには日差しが強いことも多く、日中は三十度を超える日ばかり。寒さ対策だった上着は、今は日除けのための夏用のカーディガンに変わった。

「今月の新作は、夏つぽいものが増えたね」

「はい。まだ梅雨のデザインも人気ですが、夏のデザインを選ばれる方が増えてきましたよ」

マハロでは持ち込みデザインにも対応しているが、定額制の三種類のコースが一番人気である。

五月の新作デザインは梅雨を連想させる傘や紫陽花あじさいのアートが並んでいたが、今月からは貝殻やサンゴのような海のデザインが加わった。希望すれば過去のデザインを選べることもマハロのリーダーに好評だが、多くの客は新作のデザインを選ぶ。

咲良の今のネイルは、淡いパール系のシェルを並べたり手描きの紫陽花あじさいを施したりと、梅雨を意識したデザインにしている。

「新作も可愛いけど、深澤さんのネイルもいいな。今から紫陽花あじさいのデザインって遅いかな？」

三十代前半の女性客は、もう三年以上も咲良を指名してくれている。そのため、こんな風に気軽に相談されることも多い。

「そんなことないですよ。まだ梅雨入りもしてませんし、一か月後くらいなら紫陽花あじさいも咲いてるでしょうからいいと思います」

「じゃあ、今日は深澤さんと同じデザインにしてもらっていい？」

「はい。ただ、私のネイルは紫陽花あじさいの部分を手描きなので、追加料金が発生しますが……」

「全然オッケー！ そのネイル、すっごく可愛いし」

「承知しました。カラーはどうされますか？」

その後も相談を受けながらカラーを決めていき、二時間ほどかけて施術を行った。

「お疲れ様。ねえ、今日この間のお花見のメンバードで飲みに行くんだけど、深澤さんもどう？」

終業後、バックヤードで帰り支度をしていると、同僚の三浦みうらが話しかけてきた。咲良は「お疲れ様」と返してから、首をゆるつと横に振った。

「ごめんね。明日はボランティアの日だから、早く帰って準備とかしたいんだ」

「えっ？ 土曜なのにボランティアに行くの？」

「うん。特に予定もなかったからいいかって。土日はどうせどこに行っても混んでるしね」

「そうだけど……ボランティアなんかで潰すのはもったいないよ。っていうか、よくボランティアなんてするよね」

三浦に悪気がないことは重々承知している。

裏表がなく素直なだけで、別に咲良の活動をバカにしているわけではないのだ。彼女とは同期入社で同い年のため、他の同僚よりも距離が近いのもあるだろう。

「それに、ボランティアって老人ホームでしょ？ 若い子相手ならまだ練習にもなるけど、マニキュアでお年寄りにネイルしたってねえ……」

「確かにジェルの技術は磨けないけど、マニキュアを使うのも楽しいし、いい勉強になるよ。何より、喜んでもらえる嬉しから」

「深澤さんって、ボランティア精神がすごいよね。私は真似できないなあ」

感心したように呆れた素振りもあったが、咲良は苦笑いでごまかす。

「別にボランティア精神とかじゃないんだけどね。……じゃあ、飲み会楽しんでね。誘ってくれてありがとう」

手を振る三浦に笑顔を返し、一足先にサロンを後にした。

(ボランティア精神かあ……。本当にそういうのじゃないんだけどな)

自転車を漕ぎながら、自然と苦笑が漏れてしまう。

彼女以外の同僚からも、何度か『ボランティアなんてよくやるよね』と言われたことがある。周囲からすれば、咲良の行動は理解に苦しむのかもしれない。

ただ、咲良自身にはそんなつもりはないため、ああいう風に言われるたびに微妙な気持ちになっ  
てしまう。生温い風を受けながら息を小さく吐くと、自宅の最寄り駅が見えてきた。

先週も今週も帰宅時に駅前川辺に声をかけられたため、自然と身構えてしまう。

大柄な男性を前にすると萎縮してしまつて、『急いであるので……』と答えて逃げるのが精一杯だった。そのときのことを思い出して身体が強張り、慌てて深呼吸をした。

駅を横目で確かめながら、大通りを渡って路地に入っていく。小さな商店街を抜けて住宅街に入ると、人がまばらになつていった。

赤信号で停まり、ようやくわずかな安堵感が芽生えて深呼吸をする。念のために振り返ったが、川辺らしき人物の姿は見当たらなかった。

そういえば、咲良のことを彼に話したのは、三浦だった。

あの日に会つた男性といい感じになつたと話していた彼女に、悪気がなかったのはわかる。ただ、誰が咲良の通勤手段を話したのかと尋ねたときの本人の態度からはあまり深刻に受け止めていない様子で、何ともやり場のない気持ちに包まれた。

通勤ルートを変えようかと悩んだが、駅前を通る道が一番明るくて人通りがある。

中学時代の一件で夜道が苦手になつて以来、とにかく少しでも人通りが多く、明るい道を選ぶようになった。川辺の行動を思えば違う道を使いたいが、今より不安が増えそうで結局は通勤ルートを変えることは諦めたのだ。

(でも、また会うようなら道を変えた方がいいよね……。何かあつてからじゃ遅いし……)

アパートに着いてホッとしたのも束の間、背後から足音が近づいてきて全身がびくりと跳ねた。

恐る恐る振り返ると、同じアパートに住む男性が自転車置き場を通り過ぎていった。

挨拶をするような関係ではないが、顔見知りではある。会釈を交わし、男性に続いてエントラン

スのドアを抜けた。

足早に部屋にたどりつくると急いで鍵を閉め、息を大きく吐く。

(いつまでこんな風に怖がらなきゃいけないんだろう……)

トラウマといえば大袈裟に聞こえるが、咲良にとつてはそれも同然である。必要以上に警戒し、恐怖心を抱く毎日は、疲労と不安に苛まれてばかりだった。

家族や高校時代からの親友である皆原一紗みなはらかずさはいつも親身になつてくれるが、できるだけ心配をかけたくない。そんな思いもあつて、まだ川辺のことは誰にも相談できていなかった。

翌日、咲良は一月ぶりにひだまりを訪れた。

職員も入居者もいつも通り歓迎ムードで、昨夜から沈んでいた心が浮上する。

男性にはハンドマッサージとネイルケアを、女性にはネイルをしていく。施術中にはみんなこぞつて楽しい話題を提供してくれ、自分が話し相手になれることも嬉しかった。

もともと、咲良はおばあちゃん子だった。

亡くなった父方の祖母は、咲良をいたく可愛がり、そして心配してくれていた。咲良にとって心の拠り所で、信頼できる存在だった。

けれど、その祖母は大腸がんを患い、咲良が就職する前に亡くなった。

『咲良が就職したら、お客さんとしてお店に行くからね』

何度もネイルの練習台になつてくれた祖母の口癖だった願いは、永遠に叶うことがないままに。

そんな事情もあって、ひだまりで過ごすひとときが余計に大切に思えるのかもしれない。

「あれ？　そういえば、セツさんはお部屋ですか？　次はセツさんの順番なんですけど」

咲良が今いるのは、食事を摂ったりレクリエーションをしたりするリビングの一角なのだが、普段はみんなの中心にいるはずのセツの姿が見当たらない。

すると、側にいた藤野が「今、お孫さんが来てるんだ」と答えた。

「ほら、セツさんの自慢のお孫さんだよ。咲良ちゃんが来る前に二人で部屋に行っちゃったんだ。すぐに呼んでくるから、ちょっと待ってて」

彼が声をかけにいつて程なく、背後から「咲良ちゃん！」と明るい声が飛んできた。

「セツさん、こんにちは」

振り返った咲良の視界に真っ先に入ってきたのは、セツの車椅子を押す男性の姿だった。

車椅子が小さく見えるほど、がっしりとした身体つき。広い肩幅はもとより、肩も二の腕も鍛え上げられていることが一目でわかる。

少し切れ長の双眸そうまゆに宿る眼光は鋭く、真っ直ぐに見据えられている。意志の強そうな凛々しい眉に、真一文字に結ばれた薄い唇。

鼻梁びりょうは歪みがないほど美しく通り、輪郭まで無駄なく引き締まっている。ビジネスショート風に整えられた黒髪は、すつきりとしていて艶がある。

車椅子を押すために少し屈んでいるが、身長も咲良と三十センチは違うだろう。

セツが『いい男』と自慢するだけあって、精悍さと美麗さを兼ね備えた男性だった。

「咲良ちゃん、紹介するわね。孫の桜輔よ。ほら、いつも話してるでしょ」

「は、はい……。はじめまして、深澤咲良です。セツさんにはいつもお世話になっています」

「はじめまして。堂本桜輔です。こちらこそ、祖母がいつもお世話になっています」

会釈をした桜輔は、身構えていた咲良を真っ直ぐ見て瞳をわずかに緩めた。

不意に柔和になった表情に、咲良は思わず息を呑みそうになってしまう。微かな笑顔だったのに、そこにはわかりにくい優しさが滲んでいた気がした。

「もう、桜輔ったら。もっと愛想良くしなさいな」

「ちゃんと笑っただろ」

「あなたの笑顔はわかりにくいのよ」

セツと彼の会話は、祖母と孫の微笑ましいやり取りだった。

咲良はそう思う一方で、自身の鼓動が落ち着きを失なくしてしまったことに気づく。居心地がいいはずのひだまりのリビングなのに、何だか身の置き場がない。

心がむずむずして、どんな風にしていけばいいのかわからない。目の前の二人に向けた視線は、まるで居場所を求めるように泳いでしまう。

「咲良ちゃん、今日は私の部屋でもらってもいいかしら？　桜輔にも見てもらいたいのに」

「えっ？　えっと……それは、職員さんの許可をいただかないと……」

きちんとした決まりではないが、施術は基本的にリビングで行っている。各部屋で行う場合には、職員の許可を取るようになっていた。

すると、すぐ側にいた女性職員が「構わないですよ」と快諾した。咲良は戸惑いを抱えつつも、喜ぶセツと桜輔とともに移動した。

「今日はどんな風にしますか？」

小さなテーブルを挟んで咲良とセツが向かい合うと、彼はセツの隣に置いた椅子に座った。

介護ベッドが置かれた八帖ほどの部屋に大人三人が集うと、密集する感じがある。男性が苦手な咲良にとっては苦痛になるかと不安になったが、芽生えてきたのは緊張感だけだった。

「そうねえ……桜輔、何色がいいと思う？」

「俺がそんなことわかるわけがないだろ」

「もう、つまらない男ねえ。女性が『どれがいい？』って訊いたら答えてあげるものなのよ」

「俺じゃなくて、彼女に訊けばいいだろ。プロなんだから」

桜輔にじつと見つめられ、咲良は咄嗟に目を逸らす。

「咲良ちゃん、どれがおすすめかしら？ 六月に入ったら、涼しげなものがいいかな」

「そうですね。今日はブルー系を選ばれる方が多かったですよ」

「あら、そしたらみんなと同じになっちゃうわね」

「じゃあ、グラデーションにしてみませんか？」

咲良の提案にセツの目が輝き、今日は青空のようなブルー系のグラデーションネイルにすることになった。すぐにケアをして、ネイルアートに取りかかる。

丁寧にアートを施していく間、彼は珍しいものでも目にしたときのようにまじまじと見ていた。

慣れた工程なのに、黙ってじつと見られていると緊張感が大きくなる。そのせいか必要以上に息を止めてしまい、施術が終わる頃には疲労感に包まれていた。

「今日もとっても素敵！ ほら、桜輔、見てちょうだい！」

「ずっと見てたよ」

「やだ、もう。可愛くない返事ねえ。もっと褒めてほしいわ」

「綺麗だけど、すごいのは彼女じゃないか。ばあちゃんはずっと喋ってただけだろ」

「まあ……。あなたは相変わらず女心がわからないのね」

少し拗ねたようなセツに、桜輔が困ったように眉を下げる。

武骨で何事にも動じなような外見とは裏腹に、どうやらセツには弱いらしい。それがおかしくて、咲良はついクスツと笑ってしまった。

すると、セツが咲良を見て優しく微笑んだ。

「ねえ、咲良ちゃん。この間話してたこと、桜輔に相談してみない？」

「えっ？」

「初対面の男の人に相談するなんて抵抗があるかもしれないけど、少しは力になれると思うの」

「そんな……。個人的なことですし、ご迷惑をおかけするわけには……」

「遠慮しないで。桜輔はこの通り愛想のない子よ。でもね、警察官としては頼りになるはずだわ。警察官だった私の夫によく似てるから」

他意のない笑顔を向けられると、セツの厚意を無碍にはできない。



「お力になれるかはわかりませんが、私で良ければお伺いします。祖母がお世話になってますし、遠慮はしないでください」

どうするべきかと戸惑う咲良に、桜輔が真剣な眼差しを向けてくる。

咲良は、誇らしげに笑みを浮かべるセツを見て、もしかしたらセツはあえて今日彼を呼んだのかもしれない……と思った。

ひだまりから咲良の家までは、自転車で八分ほど。徒歩なら二十分というところだ。

慣れた道だが、初対面の男性と二人で歩くには少々気が重かった。桜輔は咲良の自転車を押してくれており、咲良は彼から一步下がるようにしていた。

「……申し訳ない」

しばらく続いていた沈黙を先に破ったのは、桜輔だった。

「やはり、初対面の人間には話しくいえますよね。祖母から『話を聞いてあげてほしい』と言われてたんですが、もしかして祖母のお節介か早とちりでしたか？」

振り返った彼に、慌てて首を横に振る。

「そ、そんなこと……。セツさんにはいつもとても親身になっていただいでて……。私、セツさんにはつい色々話してしまうんです」

「それなら良かった。あなたのことは祖母からよく聞いてました。爪を綺麗にしてくれるボランティアさんが、とても優しくいい方だと」

咲良の中に喜びが芽生える。途端に心を占めていた緊張を忘れ、自然と頬を綻ばせていた。

「セツさんにそんな風に言っていただけなんて嬉しいです。実は、私もセツさんからよくお孫さん……。あなたのことをお聞きしました」

そこまで話した咲良は、桜輔の双眸がささやかな弧を描いていることに気づく。ともすれば、見落としてしまいそうなほどの小さな変化だったが、彼は確かに微笑んでいた。

「無愛想で融通が利かない孫だとも話してるんですよ」

「いえ、そんなことは……。いい男だって自慢されてますよ」

桜輔が面食らったように苦笑を零す。それから、居心地が悪そうに顔を背けた。

「それはつまらないことを……。申し訳ない」

「そんなことありません。あなたのお話をされるセツさんはいつも嬉しそうで、面会に来られる日お待ち遠しいんだって伝わってきます。そんなセツさんを見ると、私も笑顔になれるんです」

「……どうりではあちゃんが気に入るはずだ」

「え？」

「いや、気にしないでください」

彼が言い切ってしまった、また会話が途切れる。いつも通りの帰路を案内する以外に言葉を交わさない間に、咲良の家の最寄り駅が見えてきた。

桜輔の歩幅は、体格に似合わない。咲良はそう思った直後に、彼が自分に合わせてくれているのだと気づき、その気遣いに笑みを零した。



「それで……困り事というのは、いわゆるストーカー被害ということですか？」

「……それもセツさんからお聞きになったんですか？」

「重ね重ね申し訳ない。祖母から『相談に乗ってあげてほしい人がいる』と言われたとき、祖母が知る範囲の事情は聞かせてもらいました」

「そうですか……」

「警察には相談しないと聞きましたが」

咲良は口を開きかけて、悩んだように閉じた。警察に相談しても何もしてくれないことはもう知っている、とは警察官である桜輔を前にして言いにくかった。

「相談するほどじゃないというか……最初は職場の近くにおいて、そのあと何度かうちの最寄り駅で会うくらいなので。毎回偶然を装われてますし、それこそ『たまたまだ』と言われればそれまでですし……。それに、こういうことは初めてじゃ……」

視線を伏せる咲良に、彼はすべてを察したようだった。

「そういうことなら、警察に行くのも二の足を踏むでしょう。一人で抱え込むのも無理はない」  
共感されたことはもちろん、一人で悩んでいることまで見透かされて驚いた。

「あの……どうして一人で抱え込んでるって……」

「祖母の話では誰にも相談してる様子がないとのことでしたし、今のあなたの反応で何となく。職業柄、そういう勘は働く方なんです」

足を止めた桜輔につられて立ち止まる。真っ直ぐに目が合い、彼の真摯な瞳に捕らわれた。

「でも、不安でしょう。怖い思いをされたこともあるのでは？」

「つ……はい……」

か細い声が、重なった二人の影の上に落ちた。

自分の不安を受け止めてもらったせいか、咲良の視界が滲んでいく。それを堪えるように唇を噛みしめた。

普段なら初対面の男性には必要以上に警戒心を抱くのに、桜輔に対してはそういったものが芽生えない。

セツの孫で、警察官。それは、咲良に安心感を与える理由ではあったが、咲良は心の片隅でそれだけではない気がしていた。

もつとも、そう感じる理由はわからなかったけれど……

通行人の邪魔になることに気づき、再び歩き出して商店街に入ったとき。

「咲良ちゃん？」

背後から飛んできた声に、咲良が身体を強張らせた。

先を歩く桜輔が振り返ったのと同時に、震えそうな肩に大きな手が乗る。

「ッ……!!」

全身を跳ねさせた直後に振り向くと、ニコニコと笑う川辺が立っていた。

「偶然だね！ 今日仕事だったの？」

「い、え……今日、は……」

声が震える咲良の様子から、桜輔が何かを察したらしい。彼はすぐさま自転車を止め、咲良を庇うように立った。

「咲良、こちらの方は？ ご友人？」

「咲良ちゃん、この人は？」

二人から同時に質問を受けて戸惑うと、桜輔がすかさず口を開いた。

「堂本と申します。咲良とは親戚で、これから二人で出掛けるんです」

咲良は目を見開きそうになったが、桜輔に寄越された視線を受け、慌てて川辺に頷く。川辺を見る桜輔は笑顔だったが、その目はちつとも笑っていないかった。

「そうなんです……。えっと、だから……」

「へえ、そっかあ。邪魔しちゃってごめんね」

すると、川辺はあっさりと踵を返し、駅の方へと歩き出した。あまりにもすんなりと引き下がられて、咲良は安堵するよりも困惑してしまう。

桜輔は、川辺の後ろ姿が見えなくなったあと、咲良に隣を歩くように告げて家まで案内させた。

「あの……送っていただき、ありがとうございます。それに、さっきのことも……」

「気にしないでください。それより、あの男ですんね？」

「はい……」

「すんなり引いたところを見ると、今のところ危害を加える気はないと思いますが……。念のためにはばらくは警戒し続けた方がいいな」

咲良の表情が曇っていく。芽生え始めていた安心感は消え、すぐに不安へと戻っていった。

「申し訳ない。脅すつもりはないんだ。現状、できることがなくて心苦しいですが、近くの交番にパトロールを強化するように進言しておきます」

「ありがとうございます……」

咲良が笑わなければ、桜輔に気を使わせてしまう。そう思うのに、上手く笑みを繕えない。

「この近くにゆつくりできそうな店か公園はありますか？」  
「え？」

「少し休んでから家に入るといい。それまで一緒にいますから」

咲良は慌てて首を横に振ったが、彼は「どうせならコーヒーでも飲める方がいいか」と独り言ちた。

結局、その言葉に甘えるように、駅前のコーヒーショップに戻った。

桜輔は、コーヒーとカフェオレを購入すると、ただ側にいてくれた。

小さなテーブルを挟んでいるのは先ほどと同じなのに、あのときに感じていた緊張感はなく、少しずつ心が落ち着いていく。彼が静かに咲良を見守るようにしながらも、ときおり他愛のない話を振ってくれたおかげかもしれない。

そうして一時間ほど一緒に過ごして咲良の不安が溶けた頃、桜輔は再びアパートの前まで送ってくれた。繰り返してお礼を言う咲良に、彼は首を横に振った。

「それより、落ち着いたようで良かったです」

向けられたのは、柔和な笑顔。  
今日一番の優しい表情を前に、不意打ちを受けた咲良の鼓動が大きく高鳴った。

### 三 初めての感情

暦は七月に入り、夏特有の蒸し暑い夜が続いていた。

帰宅後にシャワーを浴びて一息ついていると、咲良のスマホに着信が入った。

ディスプレイに表示された着信画面には、【堂本桜輔】という名前。咲良は深呼吸をしてから通話ボタンをタップし、スマホを耳に当てた。

「もしもし……？」

上ずりそうだった声は、小さな咳払いでごまかす。

『こんばんは、堂本です』

直後に咲良の鼓膜をくすぐったのは、低く落ち着いた声音だった。

「あ、はい。えっと、こんばんは」

反して、咲良の心は急にソワソワしてしまう。

『今、お時間は大丈夫ですか？』

落ち着かない中、桜輔に問いかけられ、「はい」と返した。

『その後、何か変わったことはありませんか？ ああ男のことはもちろん、それ以外でもお困り事

などは？』

桜輔に送ってもらったあの日、彼と連絡先を交換した。以来、二日に一度ほどの頻度で電話をくれ、こうして咲良の様子を気にかけてくれている。

「はい。特に何もありません。今日も無事に帰宅できました」

『そうですか。何もないようでしたら良かったです』

あの日以降、川辺の姿は見かけなくなつた。彼が職場の周辺や最寄りの駅前に姿を見せることなく、咲良はこの半月ほどは平穏な日々を送っている。

もちろん、完全に安心できているわけではない。それでも、こうして連絡をくれる桜輔のおかげで少しづつ恐怖心が薄らぎ、日に日に心が凜いでいくようだった。

親しくもない咲良に対して、ここまで気遣ってくれることをありがたいと思う。反面、セツから多忙だと聞いていた彼の手を煩わせている気がして申し訳なさも募っていた。

桜輔にとつては仕事の一環かもしれないが、咲良が知っている警察官の対応とは随分と違って、少々戸惑っている部分もある。嬉しさや心強さも大きいものの、このまま甘えていてもいいのかという困惑もあった。

「あの……堂本さん」

『はい』

「頻繁にお電話をいただけるのはすごくありがたいんですが、あれ以降は何もありませんし、多分もう大丈夫だと思います。ですから、こんなに頻繁にご連絡をいただかなくても……」

控えめに自身の素直な気持ちを告げれば、電話口の彼が纏まとう空気がふっと和らいだ。

『祖母が本当にお世話になってますから、これくらい何でもありません。何より、警察官として放っておけない』

ありがたい。嬉しい。心強い。そんな気持ちとは裏腹に、本当にいいのだろうか……と思う。いくらセツの紹介とはいえ、こうして助けられてばかりでは申し訳なさかごんごん膨らんでいく。

元来、人を頼るのが苦手な咲良は、厚意を素直に受け取ることに慣れていないのもある。

『でしたら、何かお札をさせていただけませんか？』

『お札？ いや、これはあくまで職務の一環ですから』

『でも、先日助けていただいたときはプライベートでした。それに、セツさんのご紹介でなければ、堂本さんにごまでしていただくことにはならなかったはずですし……』

『本当に気にしないでください』

『あと、カフェオレだつてご馳走していただきましたから』

自分の気持ちが収まらない。少なくとも、川辺から守つてくれたあの日の桜輔は、プライベートの時間を割いてくれていたのだ。そして、おそらく今もそうなのだろう。

『わかりました。では、食事でも行きませんか』

『えっ？』

『もちろん、無理にとは言いませんが……』

悩んだのは、わずかな時間だった。咲良は緊張感を抱えつつも、「はい」と頷うなづく。

『ぜひ、何かご馳走させてください』

『いや、それは……まあ今はいいか。じゃあ、ご都合がいい日はありますか』

彼は一人で完結させるように呟き、そう口にした。

桜輔と会うことになったのは、それから三日後の咲良の休みの日のことだった。

朝からよく晴れた真夏日で、夜になつても気温はあまり下がっていない。蒸すような暑さの中、まだ日が沈み切っていない道を歩いて駅に向かった。

火曜日の十九時前。七月の今は日が長く、この時間でもそれなりに明るい。

夜道ではないこと、これから桜輔に会えること。彼と食事をすることへの緊張感が大きすぎて、小さな不安はすぐに埋もれていった。

慣れた道にパンプスの音を鳴らしていると、視線を感じて振り返った。しかし、咲良の視界の中には通行人の姿しかない。

気のせいだと思い再び歩き出したが、なぜか誰かに見られている気がしてならない。不思議なもので、一度気になるとどうにも身構えてしまう。

咲良は急ぎ足で商店街を駆け抜け、大通りのある大通りを渡つて駅に着いた。

ふう、と息を大きく吐いてしまう。無意識に身体が強張こばっていたのか、必死に歩いてきたせいか、額がじんわりと汗ばんでいた。

すぐ目の前のパティスリーで焼き菓子と紅茶のセットを購入し、ラッピングをしてもらっている

間にハンカチで汗を拭い、手櫛<sup>てび</sup>で前髪を整える。

桜輔は車で来ると言い、家までの送迎も申し出てくれた。けれど、咲良は申し訳なさから『駅前

で用事があるので』と告げて、駅で待ち合わせるように頼んだのだ。彼のことから帰りは送ってくれるかもしれないが、今日は咲良がお礼をしたいと申し出ているため、そこはきちんと断ろうと思っ

ている。商品を受け取って外に出たあとで、ヘアアップにした髪が崩れていないかと気にしていると、すぐ側に停まった車から桜輔が降りてきた。

「こんばんは。お待たせしてすみません」

つい十分ほど前までは誰かの視線を気にしていたが、彼の顔を見たおかげかもう不安はない。むしろ、どこかホッとした。

「いいえ、私も今着いたところです。お仕事、お疲れ様でした」

「ありがとうございます。車で店まで行こうと思うんですが、電車の方がいいですか？」

親しくない男性の車だが、桜輔のことは怖くない。苦手な電車よりも彼の側の方がよほど安全に思えて、咲良は「大丈夫です。よろしくお願いします」と微笑んだ。

桜輔は助手席のドアを開けてくれ、咲良は緊張しつつシートに腰掛ける。すると、運転席に回った彼との距離が近いことに、どうにも身の置き場がないような感覚を抱いた。

(運転席と助手席の距離って、こんなに近かったっけ……?)

「じゃあ、店に向かいます」

「はい。よろしくお願いします」

咲良が咄嗟に平静を装って丁寧な頭を下げれば、桜輔が口元をわずかに緩めた。微かなその変化は、きつと瞬きをしていれば見過ごしていただろう。

緊張感でいっぱいになりそうだった咲良だが、彼のわかりにくい変化に気づけたことが嬉しくて、ほんの少しだけ肩の力が抜けた。

店は桜輔が選び、予約までしてくれていた。これではお札にならない気もしたが、『こちらで手配しておきます』と言われてお願いしたのだ。

スペイン料理をメインにしたバルの店内は、壁にスペインの街と思しき写真が何枚も飾られ、テーブルごとに壁で仕切られており半個室になっている。

個室なら気まずさが勝るかもしれないが、咲良の中に抵抗感はなかった。それに、このタイプのテーブルなら人目をあまり気にせずにいられる上、ゆっくり話せるだろう。

「素敵なお店ですね。よく来られるんですか？」

「同期と一度来たのですが、料理がうまかったので。あ、スペイン料理は大丈夫ですか？」

「はい。パエリアとか生ハムが好きです」

「じゃあ、それは頼みましょう」

桜輔は外見こそ取っ付きにくそうだが、話してみると意外と会話が途切れない。表情の変化はわかりづらいものの、怒っているわけではなく無愛想なだけだと思えば気にならなかった。

そもそも、先日は咲良が落ち着くまで一緒にいてくれ、頻繁に電話までしてくれている。そういつた

ところに始まり、今日は車の乗降時にドアを開けてくれたり、咲良の好みを尋ねつつメニューを選んでくれたりと、気遣いができて優しい人だとよくわかる。

(セツさんの話だと独身だつてことだけど、恋人とかいないのかな?)

ふとそんなことを考えてハツとする。

もし彼に恋人がいれば、こうして会っているのは良くないことではないだろうか。そんな思いが過り、慌てて口を開いた。

「あの……堂本さんって恋人とかいらつしやいますか？」

注文を終えるなり尋ねた咲良に、桜輔が意表を突かれたように瞠目する。

「い、いや……そういう人はいませんが……。どうしてですか？」

戸惑いを浮かべる彼の表情に、咲良はホッと息をついた。

「良かったです。もしそういう方がいらつしやれば、こうしてお会いするべきじゃなかったと心配してしまつたので……」

きよとんとした桜輔が、ため息交じりに眉を顰める。咲良は自分が失言したのかと不安を覚えたが、一瞬気まぎらな空気がすぐに溶けた。

「お待たせいたしました。ドリンクと生ハムです」

タイミング良く来てくれた店員に感謝しつつも、数十秒前の桜輔の様子が気になる。そんな咲良を余所に、彼は「食べましょう」と短く告げた。

咲良はノンアルコールのサンテリアに、桜輔はウーロン茶に口をつける。途端、先ほどまでに反

して沈黙に包まれた。

お礼を、と言つたのは咲良だ。しかし、咲良は男性と二人きりで食事をしたことなんてない。

恋人どころか好きな人もできないまま、二十七年。そんな咲良から、気の利いた言葉が出てくるはずがない。

彼も気まずいのか、生ハムを二枚食べたきり、手も口も動かしていなかった。

(ええっと、何か話題を……。川辺さんのことと電話のお礼は車で言つたから、それ以外で……。ひだまりの利用者さんなら男性でも普通に話せるのに……)

グルグルと考えていたとき、自分たちの共通の話題を見つけた。

「セツさんって、素敵な方ですよ。明るくてお話が上手で、ときには冗談も言ってくれて……。セツさんと話すと、いつも元気をもらえるんです」

桜輔の瞳が和らぎ、咲良は自身の選択が間違っていなかったことに安堵する。

「マニキュアを選ぶときははすぐく楽しんでくださつて、ネイルが完成すると満面の笑みを見せてくださるんです。私、いつもそれがすごく嬉しくて」

夢中でセツを褒めていると、彼の双眸がどどん柔らかくなっていく。一見するとやっぱりわかりにくい、よく見れば先ほどまでと全然違つていた。

「そうですね。ですが、祖母は一時期、あまり元気がなかったんです。でも、いつからかあなたの話をするようになって、元の明るい祖母になっていきました。祖母がまた笑顔を見せてくれるようになったのは、深澤さんのおかげだと思います」



「え？」

「祖母の足が悪くなったのは、祖父が亡くなった直後のことでした。車椅子での生活を余儀なくされたことで、祖母は以前より自分で探していたひだまりに入ると言い、一人で今後の身の振り方を決めてしまいました」

ためらいを覗かせながらも、桜輔の口調はしつかりとしたものだった。ただ、そこには後悔が滲んでいるようにも感じる。

「祖母は、誰にも迷惑をかけたくなかったんでしょね。もともと自分のことは自分でしたいというタイプの人間ですし、人に頼るのもあまり得意ではない人ですから、家族に介護をさせるよりも施設に行く方がいいと思っただんでしょ？」

「そう、だったんですね……」

「ひだまりには本当は祖父と同居するつもりで、二人で見学にも行ってたそうです。でも、結果的にこうなってしまいました。『みなさんが良くしてくれるから心配しないで』と言いながらも、以前のような笑顔は見せなくなって……」

セツの話しぶりを思い返せば、夫婦仲はとても良かったのだろうと想像できる。老後を夫と二人で過ごすつもりで見学に行った施設に一人で入るのは、いったいどれだけ心細かっただろうか。

「俺も家族もできる限り施設に通いましたが、祖母の元気がないのは明らかでした」

セツの気持ちを考えれば、咲良の鼻の奥がツンと痛んだ。

「でも、ある日面会に行ったら、祖母が昔と同じような笑顔を見せてくれたんです。そのときに

真っ先に爪を見せてくれて、『ボランティアさんにしてもらった』と。祖母はあなたの話をたくさんしてくれました」

桜輔が咲良を真っ直ぐ見つめる。その双眸は、とても優しくかった。

「嬉しかった。また笑ってくれるようになったことも、祖母に笑うきっかけを与えてもらったことも。だから、あなたに会えたらお礼を言いたいと思っただけです」

咲良が目を見張れば、彼が目尻を下げる。笑顔というには足りない表情なのに、嬉しそうなのが伝わってくる。

その瞬間、咲良の鼓動が大きく高鳴った。

ドキドキと脈打つ心音のせい、胸の奥がきゅうつと締めつけられる。けれど、決して嫌な感覚ではない。

甘さを孕んだ苦しさに、心に広がっていくのは喜びだけ。

セツを笑顔にする手助けができていたのなら嬉しい。桜輔にそんな風に言ってもらえたことも、とても嬉しい。

だから、芽生えた喜びはそのせい。ただ、胸の奥を締めつけるような甘切ない感覚が生まれた理由がわからない。

「祖母をまた笑顔にしてくれて、ありがとうございました。あなたとの時間は、きつと祖母にとっただけがえのないものだと思います」

たかが、ボランティアだ。同僚には理解されず、ボランティアをしていると話せば半笑いを返さ



れたことも少なくはない。

偽善だと言われたことはないが、それらしい言葉を向けられたこともある。あの花見で咲良がボランティアでひだまりに行っていると同僚の誰かが話したとき、男性陣の中には理解できないと言わんばかりに笑っている者もいた。

「ボランティアと聞いてますし、ずっと続けることは難しいと思いますが、ひだまりに通っていただける間は祖母の話し相手をしていただければ嬉しいです」

けれど、桜輔は違う。

セツのことを差し引いても、咲良を氣遣った上で咲良のやってきたことをきちんと認めてくれている。そんな気がした瞬間、咲良の胸の奥からグツと熱が込み上げてきた。

(何これ……。胸が苦しくて、熱を持ったみたいで……。でも嫌じゃない)

初めて抱く感覚に、困惑してしまう。それなのに、嫌ではないという気持ちだけは明確に存在している。

無愛想だと聞いていた桜輔が、こんなにも話してくれることも嬉しかった。

「……と、話してばかりですね。いい加減に食べましょうか」

ちょうど運ばれてきたパエリアとアヒージョからは、魚介類やニンニクとオリーブオイルの香りが漂い、空腹の胃を刺激してくる。

ところが、好物を前にした咲良はというと、ちっとも食が進まない。お腹は確かに空いているのに、胸がいつばいで食欲がどこかにいつてしまったようだった。

「口に合いませんでしたか？」

「い、いいえ！ すごくおいしいです！」

咲良の様子を窺う彼に、慌てて笑みを返す。そのままスプーンを口に運び、「おいしいです」ともう一度言った。

(いけない……。気を遣わせたよね……)

それからはどんな話をしたのかはよく覚えていない。あまり口数が多くないと思っていた桜輔が色々話してくれていたが、咲良は食べるのと相槌あきこを打つだけで精一杯だったからである。

緊張のせいか、お酒を飲んでいないのに頬が熱い。胸がいつばいなのに無理して食べたからか、余計に胃のあたりが苦しくなってきた。

平静を装っているつもりだが、何か粗相をしていないだろうか。

そんなことばかり考えていた咲良を余所に、彼はいつの間にか会計を済ませ、当たり前のように家まで送ってくれた。

\* \* \*

七月も終わる頃。

咲良は、一紗が働く美容室、『Duo』を訪れた。

「今日はどうする？」

「髪は毛先を整える程度にしてほしいんだけど、カラーはまだ決めてなくて」

「夏だし明るくする？」

「うーん……そうだなあ」

タブレット端末で見せられたのは、彼女のようにブリーチをしているであろう明るい髪色ばかりだ。流行りのインナーカラーもあるが、どれもピンと来ない。

（堂本さんって、どんな髪色が好きなのかな？ 真面目そうな人だから、あんまり明るい色は好きじゃない気がするなあ……）

ついそんなことを考えた自分に驚き、咲良の中に戸惑いが芽生えた。

二人で食事に行ったのは、もう十日ほど前のこと。

結局はアパートの前まで送ってもらったため、お茶でも出した方がいいのかと思つて勇気を出してみると、あっさりと断られた。

『いくら警察官でも家にまで上がられるのは抵抗があるでしょうし、そもそもそういったお気遣いは不要です』

口調こそ冷たく感じたが、それが咲良を思いやつてのことだというのは伝わってきた。

ただ、本心では抵抗感はなかった。もちろん、狭い家で男性と二人きりになれば緊張はするだろうと予想はできたが、彼に限っては怖いとは思わない。

自分でも不思議ではあるものの、それだけは確信していた。だから、断られたときにはほんの少しだけ残念な気持ちにもなったのだ。

（結局、お礼にならなかつたな……。堂本さん、迷惑だつて思つたりしたかな……）

「咲良？ 聞いている？」

桜輔のことを考えていると一紗に顔を覗き込まれ、咲良はハツとした。

「疲れてる？ 仕事が忙しいの？」

「そういうわけじゃないんだけど……」

話せば長くなるが、彼女とはこのあと食事に行くことになっている。

咲良と一紗は親友でもあるが、互いに客でもある。いつか独立するという同じ夢を持ち、応援も兼ねて指名し合っているのだ。

高校時代からの付き合いのため、それぞれの好みは把握している。ネイリストと美容師としても信頼し合っており、客として店に訪れた日は夕食を共にするのが恒例だ。

「あとで聞いてくれる？」

「オッケー。じゃあ、とりあえずカラーを決めようか」

彼女の笑顔に心強さを感じ、咲良はタブレットを見ながら髪色を決めた。

すっかり日が暮れた頃、咲良と一紗はデュオから程近い居酒屋に来ていた。

ドリンクと料理を注文し、まずは喉を潤してお腹を落ち着かせる。

結局、髪はいつも通り暗めのブラウンに染めた。長さもほとんど変わらないため、一見すると変化がないように思える。

しかし、ヘッドスパで頭がすつきりし、トリートメントのおかげで艶も出た。彼女が丁寧にブローをしてくれたため、いつもは纏まりづらいうわふわの髪質も今は落ち着いている。

「もっと明るくしちゃっても良かったと思うけどな」

「金髪にしたときのこと、覚えてるでしょ？ 私には似合わなかったから明るい色はもういいよ」「いや、あれは痴漢対策だっただけね！ 今ならもっと似合うようにするって」

就職後、電車での痴漢被害に悩む咲良の髪を明るく染めることを提案したのは、一紗だ。

それまでは目立たないように地味な格好をしていたが、効果がなかった。そこで『逆にすればいいんじゃない？』と言った彼女のアドバイスで金髪にしたのだ。

結果的にあまり意味はなく、何よりも金髪が似合わなかったことにより、その作戦は一度きりで終わってしまったのだけれど……

「そういえば、何か話があるんだよね？ まさか、また変な男に狙われてるとかじゃ……」

「それはもう解決したんだけど」

「えっ？ ちょっと待って！ 解決したってことは何かあったの？」

思わず口が滑った咲良に、一紗が「聞いてないんだけど！」と眉を寄せる。

「そういうときは真っ先に相談しろって言ってるじゃん！」

「ご、ごめんね……。確信がないわけじゃなかったんだけど、相談するほどひどい被害ってわけでもなくて……」

「違うでしょ！ 何かあつてからじゃ遅いから、いつも相談してって言ってるのに。咲良のことだ

から、どうせ私に話せば心配させるとか思ってたんでしょ？」

凶星を突かれて小さくなった咲良は、彼女に一部始終を話すしかなかった。川辺のことはもちろん、どんな風に解決したのか……ということまで。

「何その人！ めちゃくちゃ親切すぎない？ おばあさんが咲良にお世話になってるからって、普通そこまでしないでしょ」

「きつと、すごく責任感が強くて真面目な人なんだと思う。セツさん……その、堂本さんのおばあさんも、そんな感じのことを話してたし」

「でもねえ……下心がないとは限らないよ？ 警察官だってただの男だろうし」

「堂本さんはそんな人じゃないよ！ 助けてくれたときも食事に行つたときもすごく紳士的だったし、私が『うちでお茶でも』って言っても私を思いやって丁寧に断ってくれたし」

「え？ 咲良が男を家に誘つたの？」

「誘つたって……。そういうのじゃないからね？ ただ、お礼って意味で……。それに、堂本さんは結局すぐに帰つたし」

あの日、桜輔は洋菓子セットは受け取ってくれたが、咲良ができたお礼はそれだけだ。食事代は出させてもらえず、家まで送ってもらったため、むしろさらに恩ができてしまった。

何のために食事に行ったのか……

彼はあれ以降も電話をくれていて、咲良はどうやって恩返しをすればいいのかわからなかった。

「いやいや、咲良が自分からそんなこと言うなんて今までならありえなかったじゃん！ 何で？」

その人、めちやくちや優しいとか男っぽくないとか？」

「食いつく一紗を窘めるように、咲良は首を大きく横に振る。

「優しいのは間違いないけど、すごく男性っぽいのよ。職業柄なんだろうけど、鍛えてるのが一目でわかるくらい体格がいいし、身長も高いし」

「……でも、その人は平気なんだ？」

「助けてくれたのもあるし、セツさんのお孫さんで警察官だからだと思っただけ……堂本さんのことは初対面のときから怖くなくて、苦手意識もなかったかな」

「なるほどねえ」

ビールをグビツと飲み干した彼女が、にんまりと口元を緩める。その目は明らかに何か言いたげで、咲良はりんごサワーのグラスに口をつけて続きを待った。

「ひよっとして、恋……かもよ？」

突拍子もない言葉に、喉を通るところだった液体が引つかかる。むせた咲良が慌てておしぼりを口に当てると、一紗はなおも楽しそうに笑っていた。

「なっ……そんなわけ……っ」

「どうかなく？ 親友の目から見れば、ないとは言え切れないと思うなあ」

咲良の頭の中に、恋、という文字が浮かんで消えていく。

絶対に違うと言いたいのになぜか上手く言葉が出てこなかった。

#### 四 急接近

八月中旬の日曜日。

咲良は、ひだまりを訪れた。

マハロには年末年始以外の店休日がなく、お盆期間も営業している。しかし、一店舗につきネイリストが二十名ほど配属されているため、シフト制ではあるものの休暇はきちんと取れる。

お盆シーズンは客足が減ることもあり、スタッフは半数しか出勤しない。咲良も二日間の夏季休暇とシフトを合わせ、今日からの四日間は休みだった。

初日の今日は、ひだまりを訪れた。

前回の土曜日に続いて、今回のボランティアの日が日曜日になったのは、ひだまりの事務員とスケジュールの話し合いで決まったこと。あくまで偶然だった。

けれど、咲良の心の片隅には桜輔に会えるかもしれない……という気持ちもあった。

食事に行ったとき、彼の非番は土日だと聞いた。警察官だからシフト制なのかと思っていたが、そうではない部署もあるのだからか。

警察組織に関する知識はなく、個人的なことを詮索するのも気が引けて詳しくは訊けなかったものの、土日が休みなら今日ひだまりに来る可能性だってある。

「こんにちは」

「あつ、咲良ちゃん！ こんにちは」